

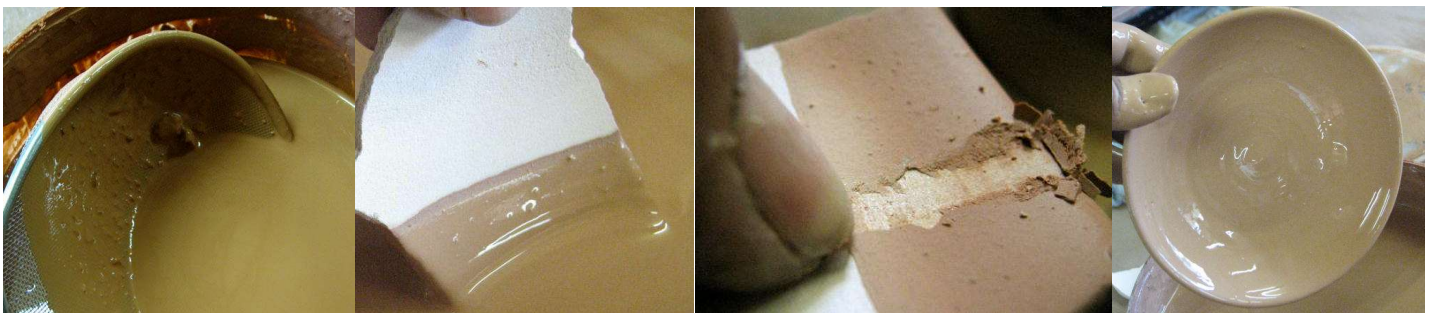


釉は掛け方で焼き物の表情を色々に変えてくれます。皆さんそれぞれ独特の掛け方をされていますが、今回は基本的な掛け方をおさらいし、私の掛け分け、二重掛けを紹介します。

## 1. 調整と釉掛け



上澄みを別の容器に取る。取った水で濃度を調整し、浮いた水が無くなるまで混ぜる。



ザルでダマを漉す。素焼片で試し掛け。釉を爪ではがし、厚さ確認。一気に掛ける。



指の跡に釉を置く。掛けムラを削り取る。表面のピンホールをつぶす。高台処理。

## 2. 筒物の内外を一気に掛ける



高台を残し浸す。口まで引き上げ中の空気を追い出すように激しく上下する。

## 3. 二重掛け



二つ目の釉を浸し掛ける。



二つ目の釉を流し掛ける。

## 4. 中と外の掛け分け



中に釉を入れこぼしながら縁まで掛ける。持ち替えて縁外を浸し掛け。



乾いたら中に手を入れ一つ目の釉と重なるように浸し掛け。

長く使わないゴチゴチになった釉を混ぜるには、一般に電動のミキサーを使います。しかし特別な道具を使わず、安全に簡単にできる方法がありますので紹介します。

## 5. 硬くなった釉の簡単な混ぜ方



釉のウズミを別の容器に移す。水が切れると、硬かった釉がポロポロと砂のようにはがれる。手でほぐしながら、取っておいた水と攪拌しながら混ぜる。



きれいに混ぜたら沈殿防止剤を入れ、濃度を調整する。  
※写真は水に溶いたベントナイト、水酢酸。

## ワンポイントアドバイス



私の所では釉薬容器にバケツで無く、重ねられる密閉容器を使っています。利点は、重ねられるので場所を取らない、乾燥しづらいため濃度が変わらない、です。

色見本は一色ごとに白土、赤土をそれぞれ酸化、還元で焼き、一枚の板に貼り付けています。一目で焼き上がりの見当が付き、便利です。